

2 ユニバーサルデザインとは

(1) ユニバーサルデザインとは

「ユニバーサルデザイン」(P58)は、「^{こうれいしや}高齢者や^{しょうがい}障害のある人など^{ひと}を含めた誰もが、はじめから^{りよう}利用しやすいように、^{しせつ}施設・もの・サービスなどに^{はいりよ}配慮を行う」という考え方で、「すべての人のためのデザイン」とも言われます。

「ユニバーサルデザイン」という言葉は、1980年前後に、アメリカの^{けんちくか}建築家、^{つか}ロン・メイス(P59)が^{はじ}使い始めました。ロン・メイス氏は、^{しょうがい}障害のある人のために^{はいりよ}配慮されたものは、他の人にも^{つか}使いやすいと考え、^{しょうがい}障害のある人をはじめ、^{だれ}誰もが^{りよう}利用しやすい「ユニバーサルデザイン」を^{ていしよう}提唱しました。

既に、^{すで}私たちの^{わたくし}身の^み回りには、^{みまわ}ライター(P59)や^{おんすい}温水シャワー付き^つトイレなど、^{しょうがい}障害のある人のために^{かんが}考え出されたものが、^だ私たちの^{わたくし}生活^{せいかつ}を^{かいてき}快適にするために^か欠かせなくなっている^{じれい}事例が、たくさんあります。

「ユニバーサルデザイン」の^{かんが}考え方は、^{かた}障害のあるなしに関わらずとい^{しょうがい}う視点^{かが}から^か生まれましたが、^{げんざい}現在では^い意味が^{おお}大きく^{ひろ}広がり、^{ねんれい}年齢、^{せいべつ}性別、^{しんたい}身体、^{こくせき}国籍、^{かか}などにも^か関わらず、「すべての人」に^{りよう}利用しやすい^{かんきよう}環境を^{せいび}整備して^いいくことを^い意味しています。

ユニバーサルデザインの7原則

ユニバーサルデザインの考え方を理解するためには、ロン・メイ
ス氏が中心になって定められたユニバーサルデザインの7原則が参
考になります。

7原則すべてを満たす必要はありません。

ユニバーサルデザイン 7原則

- 1 : 誰にでも公平に利用できること
- 2 : 使う上で自由度が高いこと
- 3 : 使い方が簡単ですぐわかること
- 4 : 必要な情報がすぐに理解できること
- 5 : うっかりミスや危険につながらないデザインであること
- 6 : 無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使用できること
- 7 : アクセスしやすいスペースと大きさを確保すること

(2) 山口きらら博での試み

平成13年(2001年)に阿知須町で開催した「山口きらら博(P58)」のテーマは「いのち燦めく未来へ」でした。

新たな未来を創造するための実験の場として、数々の新しい試みが行われました。誰もが利用しやすい環境を整備する「ユニバーサルデザイン」に対する取組も、その一つです。

取組のいくつかは、山口きらら博の会場跡地に整備された「きららスポーツ交流公園」で見ることができます。



坂道途中の休憩所

(きららスポーツ交流公園 阿知須町)

公園内の坂道は、山口県福祉のまちづくり条例の基準に基づいて、ゆるやかな勾配や休憩所の設置等の配慮がされています。

休憩所の手すりは、一般用と子供用に2本設置されています。



多目的トイレ

(きららスポーツ交流公園 阿知須町)

障害のある人のほか、子ども連れの人にも配慮して、小児用小便器、小児用便座、おむつ替えシートを設置しています。

(3) バリアフリーからユニバーサルデザインへ

本県ではこれまで、高齢者や障害のある人をはじめとする誰もが、自らの意思で自由に行動し、平等に参加することができる社会を築く福祉のまちづくりを推進するため、日常生活や社会生活を制限する様々な障壁を取り除くバリアフリー(P57)に取り組んできました。

段差を解消するためにスロープを設置するなど、個々の障壁を取り除く点において、バリアフリーは大きな成果を上げてきました。今後も、めがね、義肢など、特定の人が使用するものや、重度の障害がある人に対するバリアフリーは、重要な役割が期待されています。

しかしながら、バリアフリーの取組は、高齢者や障害のある人など「特別の配慮」を必要とする人のための取組と認識されることが多く、このことが逆に、高齢者や障害のある人を「特別な人々」として差別する意識を生んでしまうおそれがないとは言えません。

このようなバリアフリーの問題点を克服しながら、障壁をなくしていくためには、障害のある人を含めた、誰もが利用しやすい環境整備を進めていくユニバーサルデザインの考え方が必要と考えられます。既存の障壁を取り除く際にも、他の障害がある人をはじめとするすべての人に配慮したユニバーサルデザインの視点が必要と考えられます。

また、そのような考え方で整備を進めていく中で、今後の技術革新により、バリアフリーでしか対応できなかったものが、ユニバーサルデザインにより快適に対応できる可能性もあります。

このような、ユニバーサルデザインへの取組、ユニバーサルデザインのまちづくりは、誰もが自らの意思で自由に行動し平等な社会を構築する福祉のまちづくりの推進に、大きく資すると考えられます。